

4/17 朝日

細かい表情重ね音楽に生气

ヘレベツヘ指揮 コレギウム・ボカーレ&シャンゼリゼ管弦楽団

評



飯島隆氏撮影

指揮者フィリップ・ヘレベツヘが、自らが主宰するコレギウム・ボカーレ・ゼントとシャンゼリゼ管弦楽団を伴って来日している。モーツアルトの交響曲第41番とレクイエムという演奏会を聴いた(6日、兵庫県西宮市の県立芸術文化センター大ホール)。

ピリオド楽器を用い、当時の小さな編成で、ノンビブラートで奏すること自体は今では珍しくないが、この楽団が抜きん出ているのは、その素直な発音と機動的で風通しの良いアンサンブル。ヘレベツヘは、どこに打点があるのか分からないような指揮だが、細かい表情を積み重ね

ねて音楽に生气を与えるのがうまい。そして奏者たちに、この人にはいい加減なもの聴かせられない、と思わせる魅力的な人物であることが、舞台からも伝わってくる。

後半のレクイエムに至って、彼の本領はやはり合唱なのだ、と思えてくる。清潔な発音で、神経質にならない自然な息づかい、けれども音程についてはきわめて敏感で精妙な、素晴らしい合唱が、この演奏の主役だ。

余計な儀礼や威厳など一切排して、音楽の一番芯のところ、スタスタと迫るような指揮。

「呪われし者」のように管弦楽が鋭角的なりズムを刻んで、多少なりとも威嚇的になるところも、重苦しさはなく、むしろ「私を祝福された者たちに加えてください」という部分の天上的な合唱の方が印象に残る。4人の独唱も、合唱や管弦楽によく調和していたが、1人だけ挙げるならテノールのベンジャミン・ヒューレットが声の抜けの良さで印象に残った。

細部まで突き詰めるというよりは、ある種の隙を残してはいるのだが、でも全体としてはきわめて上質なモーツアルトが聴けた。

(伊東信宏・音楽評論家)